

玄遠俳句 1月号

鳥瓜 真城 蘭郷

短日の里山翳ること早し  
霧冷えに里山色を豊かにす  
時雨雲居坐るままに暮れんとす  
蔓引けば四五個連なり烏瓜  
枯れ蔓となりて真赤に烏瓜

神の留守 小島 小汀

薄紅葉濃紅葉山の七曲り  
湖に出来ない映えてななかまど  
酌み交す酒しみじみと秋惜しむ  
三猿の彫り古りゆきし神の留守  
初しぐれ白鷺河に立ちつくす

凍星 早村 春鶴

たくましき冬芽残せし枝の先  
じぐざぐに登山道あらわ冬の山  
凍星や車も人も途絶へたる  
来年の分のメモあり古曆  
稽古場が料亭となる年忘れ

初茜 一谷 春窓

平安を祈り掲げる初国旗  
故山いま映す湖あり初茜  
幼子の眼きりりと筆始  
「たつ」と書く破筆に力初硯  
八ヶ嶺をまるまる虜初茜

短日 東 素子

京の風まとう彼女の冬陽光  
フランスの土産はアートの冬談義  
前衛書究めん冬はフランス人  
前衛書史短日惜しみ語り合う  
ミュゼ浜口銅版画観しつきぬ短日

花芒 武部 春浦

寝坊して朝の雨聴く布団かな  
花芒阿蘇の中岳動かざる  
長き夜の夢断崖の深さかな  
嵐去る窓に枯葉を貼りつけて  
立冬や鳴は川面に揺られをり

冬夕焼 白原 博泉

着ぶくれて深きまなざし麗子像  
短日や裏道に来て美術館  
冬うらら母の記憶は薄れしも  
遊ぶ子に冬夕焼のひとしきり  
冬服の人がホームに溢れくる

宵しぐれ 久保 春玉

新米の香りを食べる秋となり  
新米の炊きあがる湯気香りけり  
山茶花の垣根は丸く刈り込まれ  
小雨降り山茶花の散る夕べかな  
宵しぐれつれづれ思ふこと多し

北陸の虹 山本 春英

連山に雲ただよふて紅葉す  
雪吊りを知らぬ子ばかり雪の朝  
時雨去り虹北陸の空高く  
書き足りぬことの言ひわけ息白し  
桃割れの似合ふてななつ七五三

晩秋 佐藤 雲溪

恙なき友の顔見し書展かな  
晩秋の書展に喪章つけてをり  
アルプスの連峰紅葉迫り来る  
細々とした冬支度して八十路  
公園を飛んで転んで枯落葉

玄遠俳句 2月号

冬田 真城 蘭郷

俯瞰して全く眠りたる冬田  
動くもの一つとてなき冬田かな  
神の塵集めて焚火はじまりぬ  
冬の雲仄かに入り日透かしをり  
新春を寿ぐ神楽夜を通す

去年今年 小島 小汀

天神の石の参道冴え返る  
去年今年夜空の星と昼の月  
花びらを踏みしめ山茶花垣の道  
冬空の雲なく晴れて京の影  
艶やかな土佐文旦を送られし

書初 早村 春鶴

書初の児等神妙に皆無口  
新しき筆で書初千支の文字  
園庭の真中にぼつり雪達磨  
乗初の列車満席荷の重き  
雪はらふ猛宗竹のゆれ大き

虹梁の龍 一谷 春窓

虹梁の龍の淑気に大社  
故山また映す湖あり初茜  
親戚をまはる孫らの御慶かな  
幼子の眼の光る筆はじめ  
「たつ」と書く破筆に力初硯

新春 東 素子

新春の静謐の品「心」かな  
新春に師の遺作映ゆ亀甲紋布  
縫い初めに紬の粹を生かし切り  
粹添ふカバー今年読書ゆかしけれ  
新年会古布の手作り景品に

柚子風呂 武部 春浦

「冬至は今日か」と聞きつ柚子風呂に  
スープ澄む猪鍋の猪底の底  
凧やリードで繋ぐ人と犬  
風邪気味で夢見心地の老の春  
帰り花遠くに見ゆる空青し

初詣 白原 博泉

足伸ばす天神詣で初みぞれ  
境内で焚火を囲む二日かな  
箱みくじ振れば音して初詣  
授かりし破魔矢捧げて電車込む  
南天の実の転がりし仏間かな

初便り 山本 春英

初便りそつと臨書の手を休め  
師の一声「一生県命」初講話  
「末吉」とおみくじ引きて初詣  
三陸の海生きかえる初わかめ  
見えかくれして雲間より初明り

茨の芽 田中由つこ

金のマネキン黒のマネキン冴返る  
またたび算ながれ算解く茨の芽  
このやらう表に出れど春北風  
言葉など今は要らないあをさ汁  
音の無き画廊に外す春シヨール

独楽 真城 蘭郷

勝独楽の傾きてなほ息つなく  
くろがねの独楽を宝とせし日あり  
掌に移し独楽の回転こそばゆし  
潮風に緊張つづく風の糸  
野の塵を引きずり太風揚りけり

大寒 小島 小汀

大寒の一日の荒れて暮れにけり  
海風が花を散らして水仙郷  
水平に川下へ飛び鳴一家  
午後二時の冬日たよりに出る散歩  
空青し冬木のポプラ天を突く

立春 早村 春鶴

節分の鬼に半べそ豆投げる  
寒明けて明るさもどす北の空  
春そこに来てゐる如き光浴ぶ  
午後からは日射しもどりて凍ゆるむ  
昨日とはうってかわりて冴返る

春近し 一谷 春窓

大波にゆられゆられつ見張り鴨  
この土手は母と来しこと露の臺  
一条の陽に梅が枝の蕾解く  
白梅の夫亡きあとも盛り咲く  
春近し小さく踊る鍋の箸

雪だるま 東 素子

辻切りの藁龍掲ぐ行事守る  
路地裏の形くずしつ雪だるま  
雨だれの冴えまさり土打つリズム  
枯野原昆虫しらべ命ゆたか  
冬蝶の多化性と言ふ羽化の妙

去年今年 武部 春浦

リヤカーに門松ひとつ残りけり  
歳末の賑わい昔語りかな  
父と子の二人サッカー小晦日  
初目白来たぞと弾む夫の声  
きらめきつ新年のごみ宙に舞い

寒鯉 白原 博泉

田の神の顔白ければ水烟る  
着膨れて仕事モードに切り替える  
寒鯉の池にはねたり水の音  
寒鯉の池に一筋水尾のこし  
川風に声奪われて都鳥

水仙 山本 春英

水仙は一輪がよいワンルーム  
雪雲のゆっくり街をおおいけり  
寒雀一羽が飛んで群もとび  
冬の夜や身辺整理少しずつ  
寒の星ひとりの刻を大切に

お正月 久保 春玉

箸にかけ年越しそばは湯気の中  
二三枚亡母に届く賀状かな  
お正月孫とカルタにきりもなく  
飛行船今日も浮かんで三ヶ日  
寒の灸芭蕉に習い足三里

芽柳 真城 蘭郷

青空が零す風花散華とも  
春を待つ心画展を待つてをり  
明るさを梳き込む風の柳の芽  
手に受けて芽柳の糸確かめし  
囀に膨らみきつてゐる大樹

春隣 小島 小汀

頬に手に日射しおだやか春隣  
ようやくに咲き初む一花春浅し  
陽春の一線画す高速路  
春草の地に這いつくばいて影おとす  
遠くより重ね合いつつ春の雲

春めく 早村 春鶴

春めきし心は旅路列車待つ  
春めきし農機手入れせかさる、  
微笑を交へし会釈あた、かし  
行き交ひしダンブに春泥浴びせらる  
古木皆蕾のま、の盆梅展

飛鳥の春 一谷 春窓

つかの間の春の飛鳥を巡る旅  
回廊の円柱つづき風光る  
春光や飛鳥土塀の香を放ち  
春夕焼五重の塔はシルエツト  
越して来し隣家のあかり春障子

余寒 東 素子

枯荻にカヤネズミの巢見つけたり  
枯れ枝にエビの贅タカの影  
余寒の夜いろは「ん」の謎を読む  
団塊の人図書館に余寒かな  
影やさす落ち椿ああ3・11

寒波 武部 春浦

大きくさめ止まらぬ客やバスの中  
寒鳥まだ夜は明けぬ端間より  
大寒波猫すごみけり闇の中  
汽笛飛ぶ春の嵐の夜明けかな  
弔いの供花にあふれて寒戻る

春近し 白原 博泉

残り鴨お堂に続く道すがら  
一日を終えし安堵や葱きざむ  
溜め池にゆらゆら木守柿映る  
水仙や用地の隅に固まりて  
小綬鶏に呼ばれし山の春近し

樹氷林 山本 春英

樹氷林真只中を列車行く  
霧氷林触れんばかりの車窓かな  
朗々と詩吟の女人冬座敷  
風花やぼつんとひとり字を書く子  
一株は主人に似たり冬すみれ

春の風邪 久保 春玉

息白くとがる唇春寒し  
眠りゐる母を見舞ひて春近し  
皺深き母の手なでる余寒かな  
踏めば鳴る氷の薄き朝なりし  
主婦日記三行だけの春の風邪

春暖炉

真城 蘭郷

地虫出て太陽に会ひ風に触れ  
啓蟄の植樹の土を篩ひけり  
蛇穴を出でしばかりを鳶攫ふ  
腕まくる作務衣の僧やあたたかし  
雨催ひなれば焚くなり春暖炉

震災忌

小島 小汀

近よれば花万作の盛りなり  
雨晴れて日当たる薔薇の芽立ち急  
母の日の祖母となりしも母を恋う  
早春や生々流転震災忌  
旅立ちの何時かや池の残り名も

花

早村 春鶴

出迎へば満開の花無人駅  
城門の扉開放花の径  
園庭の昼食の子と花の下  
入園式園庭にわか華やいで  
指人形動き泣き止む入園児

春炬燵

一谷 春窓

春炬燵そらとほけるも嘘のうち  
吾が老いを認めぬ娘等と花の宿  
卒園の子の渦に保母顔くずす  
摘み草やいずこに立てど土手青む  
ありしこと余さず話す入学児

花北上

東 素子

片付かぬ瓦礫の山に春の雪  
被災せる女の気丈や木々芽吹く  
港町見おろす丘の老桜  
春嵐の通過一氣に開く花  
被災地に花北上といふ便り

挿木

武部 春浦

挿木して地に一寸の生命かな  
トラツクは燃上春のま暗がり  
ホトケグサ咲きたる後に抜かれけり  
声かかり猫と花見の客となり  
聞こえきし猫のいびきと春の雨

散る桜

白原 博泉

船去りて大川に散る桜かな  
麗かや記憶の中の母笑ひ  
折り紙の蛙跳ね来し若葉雨  
初蝶をバスの中より見守りぬ  
咲き誇る紫雲英の花や父恋し

惜春

山本 春英

春雨や車の鈍き通過音  
四月馬鹿一ト日さらりと暮れにけり  
灯りゆく奈良町めぐり春惜しむ  
風光る回転木馬天へ飛び  
名も知らぬ若草なれど抜かず

牡丹 真城 蘭郷

雨意はらむ朝の牡丹に愁ひあり  
牡丹の香にもぐり込み庭手入  
牡丹咲き無住の寺と思はれず  
白牡丹月光静かに受けとめし  
閉じなんとする逡巡の夕牡丹

花吹雪 小島 小汀

大春雷響きたちまち遠のきし  
枝先へ咲き登りつつ白木蓮  
眼裏に永遠の別れや花吹雪  
チューリップ散って残りし長き茎  
河内野に黄砂降る日の暮れにけり

卯の花腐し 早村 春鶴

書作して卯の花腐しすごしけり  
野良の手に卯の花腐し骨休め  
卯浪寄す岬へ面舵自衛艦  
風止みし頃は音立て若葉雨  
店頭の縞目鮮やか初松魚

草むしる 一谷 春窓

蛸焼きを口に転ばせ新樹光  
ふるさとの山は濃緑軒菖蒲  
たぎる湯に踊る玉子や鯉のぼり  
欲の無き独りの暮らし草むしる  
橋畔に釣る人まぶか夏帽子

蜻蛉 東 素子

風来れば柳絮とならむ柳かな  
トンボサミット磐田に若葉萌立ちぬ  
蜻蛉サミット青野にしかとトンボ飛ぶ  
ベッコウトンボ守る情熱風光る  
薫風にたわまれてみし幼蜻蛉

花の精 武部 春浦

つるバラの一番咲きの白き点  
花日和横断歩道鳩渡る  
花の精寄れば輝く静けさに  
ひよっとこの踊り出でたる花の宴  
花屑の吹く寄せられし水溜り

たんぽぽ 白原 博泉

たんぽぽの絮それぞれ堤かな  
壁ぎわに燕の三羽授業中  
茅花笛吹けば激しき雨となる  
一鉢の花のカラーの明るさに  
読みかけの葉をはさみ春炬燵

春の雨 山本 春英

大字書の墨のほんやり春の雨  
高く低く連山渡る春の雨  
夜桜に流るゝギター何処より  
猫と鳩を追ふをあきらめ春の窓  
水中を登りゆく様な鯉のぼり

白木蓮 久保 春玉

手を振って母と別れの入園児  
烈風に花のしとねとなりけり  
母は我が心の支えミモザ咲く  
風あれど白き木蓮凜として  
まとまらぬまゝに出品花曇

玄遠俳句 7月号

踊子草 真城 蘭郷

招かるる如く踊子草の辺に

一水の音に輪舞の踊子草

一隅を華やかすもの踊子草

山門に柿の花散り古刹寂ぶ

螢舞ふ棚田よるべに人住める

遠霞 小島 小汀

蔓バラのアーチの根元太かりし

薔薇園にフォークダンスの輪を広げ

遠霞やがて現わる近江富士

車窓より植田のそよぎ琵琶湖畔

裏通り行けば湯の町花あやめ

栗の花 早村 春鶴

風にのり香り部屋中栗の花

黒南風漁船集ひし舟だまり

草を刈る満身に匂ひ持ち帰る

払へども蜘蛛の巣又も同じ場に

木洩れ来る陽に著我の白輝やけり

星月夜 一谷 春窓

打ちやすき球放りゐる薄暑かな

学校に馴れきし孫や心太

何気なき話大人び夕端居

両側の孫と寝てゐる星月夜

したたかに伸びる夏草鎌を研ぐ

梅雨冷え 東 素子

どくだみの花八重咲きの白さかな

青大将全身伸ばし叢へ

羞じらふて下向きに咲く螢袋

育てたる源氏螢の光りをり

梅雨冷えや検診室のひいやりと

青葉風 武部 春浦

剪定のバラを配りて日暮れけり

噴霧後の消毒のバラは縮れて咲きにけり

病む人と連れ立ってゆく青葉風

白線の歪んで見ゆる初夏の道

海と山庭の先なる端居かな

夏の蝶 白原 博泉

春日傘ゆるりと磴を下りてゆく

札所径奥へ奥へと夏の蝶

仏法僧弱き心を持って余す

かたつむり触れば角をしまいけり

行く雲やふるさと遠き蟻の道

五月闇 山本 春英

五月闇会釈返して急ぎ足

夏大根半分買うて足りにけり

涌き水で野菜を洗う麦の秋

収穫と言ふはおおげさミニトマト

変な字よ変な俳句よ梅雨暗し

母の夏 久保 春玉

葉桜に母と語りしことありし

母見舞う葉桜の風やわらかに

振り出しに戻る老婆の藤の道

緑陰に小さくなりし母に居て

一人言こぼして一人アマリリス

紫陽花 真城 蘭郷

七変化遅速のありてこそ多彩  
紫陽花の毬華やげど蝶寄らず  
濃紫陽花匂ひなきこと惜しまるる  
一山の靈域にして濃紫陽花  
雨を恋ふ紫陽花にまた雨一と日

新緑 小島 小汀

新緑や風きて木の葉さわぎ出す  
南天の花の小粒に咲き満つる  
早苗田に小鴨放してありにけり  
恐ろしき瀬音の早し梅雨出水  
梅雨の晴れ宵月清し西の空

トマト 早村 春鶴

太陽の色そのまゝに熟れトマト  
茄子トマトもぎ来て朝餉すませけり  
休耕田草丈高き晩夏かな  
せゝらぎを濁らせおきて雷雨去る  
青田見て今年の出来を予想せり

手花火 一谷 春窓

手花火にあきたらぬ子の理屈聞く  
包帯の跡くつきりと夏衣  
藪蔭の飾り水車に恋螢  
開かんとせし朝顔や髪をすく  
夏帽子大きく揺れて遊覧船

水引草 東 素子

川荒ぶれ叔母の住む地は梅雨の中  
梅雨猛暑地球も焦げるといふ便り  
日本酒に収穫の青梅漬けてみし  
足止めし我を見詰める蝦蟇の宵  
五六本水引草の花暮るゝ

猫と私 武部 春浦

カサと音若き黒蛇初夏の風  
雨模様月下美人に傘をさし  
あくびする猫と私の梅雨ぐもり  
小雀やどこへ隠れし青葉風  
白髪に香水つけて祝の座へ

梅雨晴 白原 博泉

飛燕とは雨を喜ぶ速さとも  
梅雨晴の人にそれぞれ散歩道  
片蔭の頭上に鳩の羽音かな  
七月や静寂の中の一軒家  
蚊柱や風に吹かれて衰へず

籐椅子 山本 春英

藤椅子や旧家の廊下におさまりて  
サルビヤの赤ちゃん苗の並びをり  
「龍」をテーマの書展始まる涼しさよ  
炎天の街のセールに誘われし  
リハビリに付き添ふ梅雨の晴間かな

花菖蒲 久保 春玉

花菖蒲雨降って色澄みにけり  
花菖蒲今日は三田の月参り  
夏服の少女溢れし駅ホーム  
ふるさとはもうすぐそこよ青田風  
笙の音に夏越し祭導かれ

踏青 田中由つこ

棒読みの挨拶を聞く二月尽  
早春や沈む透明度計測器  
雛の日や大人ばかりの集ひたる  
かっぱえびせん程の憂鬱菜雨  
参加することに意義あり青き踏む



玄遠俳句 9月号

青田風 真城 蘭郷

守るべき山河を誇り青田風

産土は高台に在し青田風

早朝の青田風入る書屋かな

峡の家深く鎮めて稲光

父祖の地を守り踏みしむ露の道

夏祭り 小島 小汀

鐘太鼓音澄む街の夏祭り

いつの間に形くずれし雲の峰

ひそませる手提の底の古扇

夏の川一声高し鷺飛来

うすうすと夕焼け残す雲の峰

晩夏 早村 春鶴

天の川流れいく先日本海

蛸の声遠のきて山暮る、

新涼や朝餉の食欲もどりきて

遠花火消へしが後に音のして

明け方になりて晩夏の床の冷

秋めく 一谷 春窓

一列に歩く墓参の孫五人

日焼けの子宿題に首ひねりをり

初嵐雨に怯えし夜の明くる

達磨絵の睨みひとしお稲光

赤き実を挿して玄関秋めける

立秋 東 素子

ぬぐうてもぬぐうても汗炎天下

敗者にも熱き拍手の夏ロンドン

メダリスト汗と涙の顔笑める

立秋やフェルメールの青風の中

袖通す藍のTシャツ初の秋

炎暑 武部 春浦

初蝉のひと鳴きのみ仕舞いけり

うつむいてリヤカーを引く炎天下

瓶底に動く金魚の気配あり

鮎くるといふ日を待ち居続ける

ドライブに猫も舌出す暑さかな

木漏れ日 白原 博泉

木漏れ日の下の涼しさ羊鳴く

しばらくは蛸の声聞きあたり

風に揺れしレンジョウマはうつむかず

川沿ひの茶店で凌ぐ暑さかな

静まりし街にポツカリ夏の月

蛸と踊り 山本 春英

出遅れて手拍子一つ踊りの子

踊るより夜店まわりに夢中の娘

蛸にテンポの早き木魚かな

木魚止み蛸ばかりしんしんと

水すまし空へ泳いでいる如し

七変化 久保 春玉

紫陽花は七変化とも三室戸寺

悲しみの色も混りて七変化

蛙草の色に化けたり雨蛙

耕地整理できず青田の不規則に

笙の音に夏越し祭始まれる

入学 田中由つこ

桜餅ひとつ草餅ひとつひとり

桜東風幼馴染みと擦れ違ふ

花冷えや半角文字の不安感

さっぱりと生きていかねば山桜

袖口は一折りされて入学す

星月夜 真城 蘭郷

一日も畑に入らぬ日なかりけり  
コスモスと風は相性よく睦む  
かなかなの遠く転がすやうに鳴く  
産土も棚田の一所泉湧く  
明日はよき邂逅あらん星月夜

星月夜 小島 小汀

朝の蟬昼鳴く蟬の耳底に  
山嶺の濃ゆく浮かびし星月夜  
今朝の秋狭庭に変わる風の色  
一服の茶すらことわり盆の僧  
近隣の人の集まる大花火

蕎麦の花 早村 春鶴

田の一枚蕎麦の花咲く休耕田  
宿題をまだ終へぬ児に九月来る  
蟲時雨何の気配かはたと止み  
秋草の野にある風情我が家にも  
何事もなく二百十日の暮れにけり

庭の秋 一谷 春窓

糸垂らす池一面のうろこ雲  
暗くなるまでのひととき庭の秋  
追いかける子等を逃れて秋の蝶  
本読みに引つ張りだこや虫時雨  
我が指も貸して引き算庭紅葉

虫時雨 東 素子

走りゆく少年を打つ秋の雨  
裏よりも庭よりも虫時雨かな  
チロロ鳴く夜気動かして静かなり  
路地裏の秋の風鈴鳴り始む

花火 武部 春浦

一万の打ち上げ花火渋滞車  
湾囲み花火見物席のあり  
虫食い葉バラ一輪を支えけり  
雲の峰崩るゝことの無き日かな  
やせ猫の通る道なり残暑なお

蝸牛 白原 博泉

自分らしく生きる他なし蝸牛  
打ち水や回り道して得ることも  
子かまきり我が名も知らず斧かざし  
雲かかる大坂城や夏燕  
郭公や母は卒寿を迎えけり

秋の蝶 山本 春英

秋蝶の門より出でてどこへ行く  
生きることを励ますばかり夕月夜  
お百度を踏む脚もつれ秋の風  
独り居の喜寿を迎えし九月来る  
露草の青の幾十天をさし

西瓜 久保 春玉

太陽が落ちてきそうな暑さかな  
西瓜買ふあまり重きに抱き直し  
遠き過去線香花火のポトリポトリ  
うたた寝やジャズ聞くごとく蝉しぐれ  
たっぷりと水打って待つ盆の客

青山椒 田中由つこ

朧夜のポスター高倉健眺む  
ファミリーストラン母の母と会ふ  
草の根を洗へば白し啄木忌  
能舞台解体半ば薄暑光  
裏口と口笛が好き青山椒

秋の声 真城 蘭郷

加茂川の中の大堰秋の風  
堰音が呼び込む秋の声なりし  
ふくれては落つ大堰の秋の水  
草の実の弾け飛ぶもの絮のもの  
みな飢えし昭和の記憶さつまいも

菊日和 小島 小汀

果てしなく夕日に映える蕎麦の花  
秋空にとび出すパラグライダー  
穂芒の深山に入りて茎高し  
野菊晴れ同窓会の別れかな  
旅三日戻りし庭の菊日和

秋霖 早村 春鶴

秋霖も三日続きて陽の恋し  
田畑なく秋野広がる過疎の村  
赤い羽根つけたる人のすまし顔  
四・五人の子供に託す秋祭  
松茸の穴場誰にも教へずに

秋深し 一谷 春窓

校庭に戻る静けさ銀杏散る  
若者の神輿の威勢十三夜  
何処より葛のかほりや六地藏  
夜の更けてもの書くひとり居間寒し  
青山の守り佛に秋陽濃し

秋茄子 東 素子

新米と野菜さまざままろび出し  
秋茄子の紫紺の艶を競いけり  
到来の野菜づくしに新酒酌む  
夕焼けて白萩風のあるごとし  
身にしみて我残照の中にあり

猫の盆 武部 春浦

猫の盆小さき提灯つるしけり  
庭に眠る命の数多や盆まつる  
台風の雲の一片迷ひおり  
スピーカーの音の外れて秋高し  
運動会の喚声こだま秋高し

秋の蚊 白原 博泉

秋の蚊のふはりふはりと影残し  
雑草の中より出でし小鳥かな  
猫の忌の寺に向かひし秋日傘  
川尻は鯉の釣場と聞いて来し  
蓑虫やマンション住ひ幾年ぞ

黄のカンナ 山本 春英

蘭の香を残して老師逝かれけり  
十六夜を愛でし男の背の広き  
受賞せし友の車窓に黄のカンナ  
トンネルを過ぎれば大和稲の秋  
野分雲少し急ぎて美しき

秋彼岸 久保 春玉

亀の池に亀の甲良を干して秋  
堂塔の姿整う秋彼岸  
参道の人波にあり秋彼岸  
花桔梗嫁にまかせて墓洗ふ  
借りしまま使いし扇子秋暑し

白馬の騎士 川村 春節

贈られし林檎白馬の騎士の如  
稲架を積む空に声あり故郷帰り  
霧深く江姫の村実家かな  
肌寒や聞けば気になる子の話  
聞かざれば心にかかり聞けば尚

心太 田中由つこ

梅雨明けや塚田畳店廃業す  
家に居る時間外に居る時間心太  
原っぱに寝転ぶ夏の雲ポカン  
同じ事さつきも問はれ釣忍  
ボトルごと水に凍らせ明易し

塔の秋 真城 蘭郷

深みゆく秋いかるがは古代色  
塔礎石ひそみし昼の鉦叩  
大和路の行くところ稲架匂ひけり  
ひとひらの雲も今日見ず塔の秋  
子規の句碑ほとりに憩ひ秋惜しむ

式部の実 小島 小汀

旅三日庭の小菊の乱れ咲く  
満月の欠けゆく日々や空深し  
帰り路の扉よりしだれ式部の実  
山茶花は散るためにあり裏小径  
秋空に響く爆音十機なり

冬深し 早村 春鶴

列車待つ人皆寡黙冬深し  
一夜にて並木透けたる神渡し  
裏山に雲下り来て初時雨  
文化の日書展の案内重なりて  
冬耕の土黒々と波打ちて

焚火の輪 一谷 春窓

遠巻きに小さき手のあり焚火の輪  
在りし日の母の小座敷梅小鉢  
冬晴れて酒蔵の灯の仄かなる  
俎の音澄む厨おでん鍋  
地図の旅熱き生姜湯含みつつ

晩秋 東 素子

晩秋の小さき黄蝶に誘われ  
自然守るフィールド華やぐ草紅葉  
萩原も冬の支度の気配見せ  
茗荷採り香味さわやか満ち足れり  
冷たさに掌振るや今朝の水

星冴える 武部 春浦

肌寒し始発のバスの一人旅  
星冴えて満艦飾の夜行便  
逃げていく秋の日射しに蜘蛛の糸  
きゆるきゆると雁の群鳴き渡る空  
银杏晴れ祭り法被は赤と青

ぬかご飯 白原 博泉

ぬかご飯もてなしくれし母卒寿  
門前のコスモス揺れて妹病める  
見送られ秋の雲ゆく景色かな  
秋高し新幹線は始発駅  
秋晴れや噴煙流る桜島

どんぐり 山本 春英

烏餌に直線直下秋の風  
みの虫や母親代わり婆二人  
すすきの穂太つちよになり旅立ちぬ  
引き返しどんぐり一つ掌に  
師の夢は書に生きること天高し

秋深し 久保 春玉

陽が射して寺苑の広し初紅葉  
母の目は遠き想いに初紅葉  
赤い羽胸によい事ありそうな  
ひとり居のひととき無言梨をむく  
手土産を椽に帰りし秋の暮

軽鴨 田中由つこ

軽鴨の子の放任して一列ね  
羽根を持たざる扇風機の何としよう  
鎖編みの止め時知らず心太  
メモ好きの父の手帳の雲母虫  
無香料無着色化粧水緑雨

夜長 川村 春節

同行の友の若さよ夜の長き  
七五三晴着気になる雨模様  
大木は歴史語らず飛驒の家  
握手せし手の冷たさの別れかな  
手入れせぬ柵咲きぬ今年また